

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑧1

松本五郎平

— まいばらの先人③ —

弥高に生まれて

秋になると、伊吹山麓の弥高区からさつまいもの便りが届きます。伊吹山の前面に張出す弥高山の中腹には、白鳳二年（六七三）に、修験道の始祖役行者が開いたといわれる弥高寺跡（国史跡）があります。地元では弥高百坊とよばれ、聖地として親しまれています。弥高集落は、かつて坂口、弥高坂口ともよばれる弥高寺の門前集落で、里坊などがあり、弥高寺を支えた集落です。

伊吹山の中腹に水源をもち、深い谷を刻みながら山中を流れ出た弥高川が、谷口に扇状地を作り、弥高の集落はその扇状地の扇の要に開かれています。弥高川は全長わずか三・五キロ、その扇状地も一〇・五平方キロの広がりすぎませんが、地理の授業で勉強した、扇状地の標本のように半円錐形の地形をしています。

弥高の土壌は、山中から押し流されてきて堆積した砂礫が多く、水はその間を浸透して、上流の一部を除いて普段の弥高川は伏流し、いわゆる水無川となっています。砂礫が多く、水利の便が悪いために水田を作るのができず、畑作を生産の主体とするために、かつて弥高の人びとは、食糧自給の効果的な手段を欠き、生活基盤は安定していませんでした。村人は、石ころだらけの畑に麦類・大豆・大根などを植え、農間に薪や柴を作り、山稼ぎに精を出しました。松本五郎平は、文化五年（一八〇八）五郎介の長男として弥高に生まれました。五郎平が生まれる前の天明三年（一七八三）から五年にかけて東北地方を大飢饉が襲い、二五歳頃の天保三年（一八三二）から八年には全国的な凶災を体験しています。天保七年、甲津原では二六三名の病

餓死者がありました。畑作中心の弥高でも、飢饉の打撃は深刻だったに違いありません。

坂田郡の甘藷先生

飾り気なく、素直で、忍耐力に優れた、篤農の志が厚かったと伝えられる五郎平は、青壮年期に凶作に直面し、村人の窮状を見て、弥高の村や村人を救い、繁栄を招くために、恵みのうすい弥高の土地にふさわしい作物を探し当てることを、自らに課せられた使命と決めたようです。美濃（岐阜県）や越前（福井県）を遍歴して、土地土地の特色ある作物を探した結果、換金作物として桃・栗・林檎などの果樹を試作します。しかし、土質が合わないのか、栽培法を誤ったのか、どれもことごとく失敗しました。家産は傾き、村人からは「五郎平は道楽ものよ」と嘲笑されるまでになりました。これを意に介すことなく、尾張（愛知県）でさつまいもを見出します。さつまいもは享保二〇年（一七三五）青木昆陽が、飢饉の年にも収穫できる救荒作物として奨励し、全国に普及しました。五郎平はさつまいもを弥高で試作し、成功しました。安政年間（一八五四〜五八）のことです。自信

を深めた明治三年（一八七〇）には村人にも栽培を勧め、やがて弥高の特産品として「弥高いも」とよばれて遠近にその名声をはせました。多くは彦根や長浜に出荷され、寒村弥高は近在でも裕福な村になりました。五郎平は、明治三五年（一九〇二）九五歳で亡くなりました。

戦中戦後の大増産で、飢えに苦しむ多くの人々を救った弥高いも。昭和二四年には澱粉工場が設立されましたが（昭和四〇年頃操業停止）、現在は、わずかに観光いも園を残すのみになりました。昭和十一年、平野神社に顕彰碑が建てられ、遺徳をしのんで、毎年秋の野休みの日に五郎平まつりとして、供養法要が続けられています。参考文献『草の根県史』（歴史・文化財保護室）



▲ 平野神社の顕彰碑